

生活か教育か

|| 第二回全國幼稚園關係者大會に於ける講演大要 ||

倉橋 惣 三

生活と教育と

教育と云ふ言葉は、現今では一種固定的の内容を有する様になつた。彼處に教育がある、此處は教育の場所である、この人は教育の人である、など、云ふ。即ち教育の對象となるものの固定性が、餘程しつかりして來た様に思はれる。

然し、我々が今一步思ひをかの原始の時代に馳せて考へて見たらどうであらうか。果して教育と云ふ事は、その初めから固定的の意味をもつて居つたであらうか、或時は父親はその息子を連れて曠野に獵に出る。父は自ら食ふためにまた家族を養ふために野に出るのである。この時、その愛する子供は、その傍にあつて、自分の父が、鳥や、獸を熟練したる方法でとらへるのを感嘆して見てゐる。次第に長ずれば、子も亦、父を助けて自ら獵せん事を希ふ。この時、父はその子に適當な指導を與へるのである。

又、娘は家にあつて野菜を蒐め之を料理する母を手傳つてゐる。一つ、一つ、實際に「かくせよ」と教へられる。かゝる場合に、父にせよ母にせよ、「自分は今、我子に教育をしてゐるのである」と云ふ意識は勿論もつてゐない。試みに現代人が彼等の傍に立つて、「お前は今子供に對して何をしてゐたか」と問ふならば、「鳥をとる事を教へてゐた。」「野菜を煮る事を教へてゐた。」とは答へやうが、「今教育をしてゐました」とは云はないであらう。即ち、生活そのものが教育であつて、生活して行くと云ふその事の中に教育は行はれて居つた。しかるに、人間生活の進むにつれて、事實上、生活から教育を分離してしまふ事となつた。何故實生活から教育を分たねばならなくなつたかと云ふに私はかう思ふ。

(一)人間の生活は、原始時代の様に簡單でなくなつた、自然的の生活をして居る事が出来なくなつた複雑になつて行くその實生活の中にあつて、父も母もその子の教育のために費し得る時と、又、努力とに不足を感じ始めて來た。そこで、自然の結果として、かの工業の上に分業が行はれる如く、勢力經濟の上から、此處に生活の中から教育を分離してしま

ふ事になつた。

(二)有るがまゝの状態で、有るがまゝに生活して行く人類は、時を追ふて進歩して來た。其處で、父母は其の子供の生活すべき來るべき將來を豫想して之が準備を興へ様と欲し、しかも最少の努力で、最大の効果をちさめ様と思ふ。其處で、勢ひ、複雑にして多忙なる實生活から、教育を分離してしまはねばならぬ事となつた。

生活から分離された教育と

は如何なるものか

扱、かくのごとくにして多忙であるために、複雑であるために、勢力經濟の上から己むを得ず分離した其教育は果して如何なる性質を有するものかと云へば、即ち、

(一) 將來のための準備と云ふ意味で、實際の複雑なる生活そのまゝでは到底出來ないために之の生活から分れたものであるから、慥かに普通の生活よりも簡單になつてゐる。

(二) 元來、準備と云ふ事のためには、これを最も經濟的にするのは、一々の具體的の生活の事實を

たどらずに、其中に行はるゝと考へられる所の通則を捉へて、之に據るべきである。この法則こそ、人間の有する賢き財産である。しかも法則と云ふものは抽象的の性質を帯びて居るものであるから、即ち、生活から分離された教育と云ふものは、又抽象性を有するわけである。

次に、教育は、今日の状態で見ると、其要素となつてゐるものは、人、場所、方法の三つである。實生活の複雑から、先づ、人を分離して、教育者と云ふ特別なるものをつくつた。實に生活の簡單なる原始時代には、あらゆる人は皆教育者であり得たのであるが、次に、又、教育の場所と云ふものが出來た。嘗つては、其處の森も、彼處の河も、これ皆教育の場所であつたのが、分離された場所は此處に學校組織と云ふ状態で顯著にあらはれて來た。此處に於て教育を行ふ専門家が、教育を行ふ特別の場所で、全力をあげて生活から教育を分離する事となつた果して

其結果は如何

になつたか。生活から分離された教育は、當然帶ぶ

る色彩たる、簡單と抽象とに加ふるに、教育者の努力と教育の場所の越絶とを以てして、人は知らずして教育の中に生れ、その中に人となり、實生活からます／＼遠かつて、簡單化せられ、抽象化せられたものだけを受取つて行く様になつた。かくて、今や漸く、教育が如何に生活から懸け離れてゐるかに目覺め、之が堪えざる苦痛となるに至つた。昔から今日迄、永い間のあらゆる方面の努力の結果、つひに生活から分離せられた教育は、漸く其の故郷たる根本の生活から迷ひ出てしまつた。「教育を生活にかへすべし。」「教育と生活との密接關係をつくる方法を講じなければならぬ。」と云ふ聲さへ聞えて來た、生活にかへせと云ふ呼びには、自ら二つの意味があらう。即ち

(1) 社會生活そのものからすぐに教育しやうとする考へ方で、實際、教育が生活から分離せられた當時には、「お安い御用」と云ふ譯で、教育を特別な人が特別な場所でする事をごく手輕に引きうけた。分離するがために一生懸命に努力したが、扱、生活を離れての教育は行きつまつてしまつたので、そこで、我々だけにするわけには行かぬ、社會一般の負擔に

せねばならぬ。」と云ふ事になつた。此處に社會教育と云ひ通俗教育と云ふ事などが稱へられて來る様になつた。

(2) 今一つの考へ方は學校そのものの中に實生活を取り入れて行かうとする事である。謂ゆる、生活本位、生産主義の教育論であつて、社會と學校と、社會と教育と、互に浸入浸出作用が行はれなければならぬと説くのである。是迄は社會から遠からう、生活からはなれ様と、高く厚く築きあげてゐた教育の塀が、今や低く薄くなつて來て、「まかせた」「まかせられた」と互にはなれてゐた教育と社會とが互に相接近して來る事になつた。

しかし、この接近、この融合は、果して何處迄實現せられるであらう。分離に要した時期の永かつただけ、努力の大きかつただけ、生活と教育とが自然のまゝの美はしい融合にあつた昔のその大本にかへるためには實に大英斷を要する。しかも生活の根源を先づとらへなければならぬ。と云ふ。

生活と云ふ言葉は何を意味するか

と云ふ事を慎重に考へなければならぬ。

學校の中に生活を取り入れると云へば、直ちに普通教育の中に、例へば大工、鍛冶屋の部を設けて實生活を練習させる事かの様考へる人もあらう、しかし生活を取り入れるとは例へば職工を學校の中に入れよ生活の形式をたゞ陳列的に入れよ、と云ふ事ではない、もしも、大工そのもの、鍛冶屋そのものを學校の中に入れて、それがよい教育ならば、何を苦んで我々の祖先は生活から教育を分離せんとして血の汗を流して努力しつゞけたのであるが。複雑になり行く社會生活は、到底教育を同時に行き事不可能なる事を経験したればこそ、より簡單化せられ、より抽象化せられしものを、次代の後繼者に與へんと、經濟的、分業的の立場から分離を敢行し來つたのではないか。

しかし、今や我々は實際、生活を全く離れて教育はなし得ないと云ふ事に氣がついて來た。是迄の教育が何が飽きたらぬ點かと云へば、それは即ち實生活の具體なるに比して、教育があまりに抽象的であると云ふ事である。この具體と云ひ、抽象と云ふのは、これは心理的考察の上から、形式的或は作業

的——生活の形式、作業即ち職業をそのまゝあらはすのを具體なりとするのとは意味が違ふ——の上で云ふのではない。

しからば、すべての生活に通ずる特性は何であるか私は自分一個の考へを以てすればこれを二つとする、

(一)必要と云ふ事に由つて生活する事……これこそ實に生活の生活たる所以であると私は思ふ。必要は之を主觀的に考へれば即ち目的である。而して自身自身の目的のために營む生活こそ、之即ち具體的生活である。

今日の教育は、準備と經濟の立脚點から出發してゐるために、現在必要を感じぬものにも、何時かは役に立つからと云ふ譯で與へるのであつて、被教育者にとつては必要がおこらぬ、従つて目的を持たぬのである、勿論準備は大切な事である、しかし準備のみが生活ではない、眞の生活を行ふ第一の動力は實に必要を自ら感じ、従つて自ら目的を有する所に

ある。
それ故、教育は、よし準備をするとしても、其の根源となるべきものを與へるものでなければなら

ぬ。

(二)人間は一人では居られない、人類の生活は必ず社會的の意味を有するものである。社會的とは何を云ふか、群衆必ずしも社會的ではない、形は社會的に似て之はその實、最も非社會的のものである。何とならば、たゞ多數の人が集まつたと云ふ丈けてその一人一人は、各々勝手な目的を有し、勝手に考へて互の間の相交渉する事がなければ、社會的とは云はれぬ。

眞の社會的とは、その集まれる人、一人一人が相互に認識し相互に助け合ひ其の中の一人と雖も多數の壓力の中におしつゞされる事がなく、一團となつて生活して行く事であつて、實に孤獨及單なる集合の正反體である。それ故に、隣りあれども無きが如く、人と人と相對して何等關する所を知らず、人の中にありて人を感ぜず、相觸るゝ嬉しさも味ひ得ずたゞ自分を高くし、又は、徒らに卑下して、淋しい感じを起してゐる様な人は、之社會的に生活出來ぬ人で、私はかゝる種類の人々を消極的の暴若無盡と云ひたいのである。

果して、我々は相互的關係に於て、日常生活を送

るとするならば、教育の中に生活を取り入れよと云ふその生活とは、上に述べた様にあらゆる生活に共通なるこの二つの特性を意味すると思ふ。

私は、先に、教育の三要素として、人、場所、方法をあげた。そして、人を分離し、場所を分離したと云つた、今一つの方法はどうであるかと云へば、實に

教育の方法は分離する必要はない

のである。複雑になり行く生活は、教育意識のない母親に子供の教育を委せて置く事は出來なくなつたのは事實で、必要上己むを得ず人と場所とは分離せられた。これは勿論承認すべき事であるが、しかし其方法に於ては、何も生活以外の事をしなければ生活の準備が出來ないと云ふ譯はあるまいと思ふ。教育者と云ふ特別な人が、特別な場所で行ふ教育の其方法は、子供の年令に應じた生活の必要の系列と、又、適當したる相互生活の系列であるべきで、所謂、必要はないが稽古をすると云ふ事はいけなない。

繰りかへして云へば、教育が生活から分離したの

は、餘りに生活が複雑で、子供の年齢にあはしない多くの必要が一時に存在する様になつたためである。それで、「教育」と云ふ名詞は使ひたくない、固定的の意味をもつものとせず、實生活を教育的にすると云ふ意味で用ふべきである。

この、必要及相互的生活の適當なる系列を、年齢に應じて與へると云ふ事は、幼稚園に於て最もよく行はれるのである。どうすれば、相當の複雑性を持つてゐる子供達が、その生活を必要に應じ、又相互的に營み得るかは、之實に保母その人の立案的努力に待つ外のはない。保母の任務は一つに此處にある、而して保母自身も亦子供の生活の中にはいつて、機會を捉へて教育的の發動をなすべきである。終りに

將來の幼稚園如何

と云ふ事について言しやう。これは論理的に考へて二つの方面に行き得やう。即ち、

(一)我國の幼稚園は、インフュンクショナルシステムの中に入れて、事實上、學校と云ふものと今一層組織的に結びつけて、即ち學校教育が此處まで延長されたものとし、所謂、早教育的の考へ方をするか

(二)或は學校系統を結びつけないとするならば、寧ろ、學校と遊園の合の子の様な、或は家庭と學校との仲介物の様な不徹底なものにして置かないで、全然學校と切り離れて、幼稚園を俱樂部的のものにする事である。學校とは違ふと云ひながら、事實學校の眞似をする様な事をしないで、俱樂部組織にし保母も亦俱樂部の一員となつて教育的指導を與へる様にするか。

この二つの方面の何れかに行くのであると思ふ。要するに、我々は、自ら幼稚園教育に携はるからと云つて、幼稚園教育の上に、眞理と認めたる事を、これは、幼稚園だけに於ける眞理、と考へてはならない。フレイベルは、實に人類全體に行ひ得る原理を偶々幼稚園に行つたにすぎぬので、眞理は決して幼稚園に於てのみではない。それ故我々は常に自ら教育全般に携はつてゐると云ふ考へがなくてはならぬ。

(未校閱) 文責在筆記者